

汝唯斗ナイト

なりひらいちへいた
成平一平太

壁を突き破るかのような蝉時雨もいつしか止み、秋の虫が定番とばかりに季節の変わり目を告げる。しかし、今夜の月明かりは早々と雲に隠れた。出窓のガラスに当たる初秋の雨が風に遊ばれているのかシャーラツ、シャーラツと音をたて、カーテン越しに松宮由貴子の部屋の中を埋めてくる。

由貴子は家族が寝静まるのを待っていた。壁に掛けられた時計の針が日付の変わる瞬間を告げた。おもむろにベッドから起き上がり、パソコンの電源を入れると息を吹き替えたとはかりに画面に灯がついた。由貴子のパソコンは古く、もう何代も前の代物だった。パソコンが立ち上がるまでにはしばらく時間を要する。「ウイツヒツヒ、ラリロ、ラリロ」

パソコンが立ち上がると同時に、画面の中を幼児の絵本に登場するバイキンマンにも似た愛くるしい悪魔のキャラクターが傍若無人に走り回りながら奇怪な笑い声を上げる。真つ黒な身長の三分の一はあろうかと思えるほど大きな丸い顔。右手には槍を持ち、長い尻

尾の先は矢尻のように尖っている。短い足を時々撥ね上げクルリとした大きな瞳が愛想を振りまく。音量はゼロに設定し、ミュートにしてあるので悪魔が声を発するはずはないのだが……。由貴子は急いでマウスを動かし音量を絞った。相変わらず愛くるしい悪魔は、画面の中を処狭しと走り回っている。由貴子はベッドから降り、ドアに耳を付けて廊下の様子を探った。どうやら家族の誰もが悪魔が発した奇怪な声に気付いてはいない。由貴子は再び背中を壁に預け、あらためてパソコンの画面に見入った。相変わらず悪魔は踊りながら何かを話しかけている。いや、話掛けているというよりは由貴子に懇願しているかのように見えた。「ふうー、助かった。声が出せないと苦しくて息がつまりそうになる」

由貴子がミュートを外すと愛くるしい顔の悪魔が生き返ったかのように小さく呟いた。由貴子は慎重に音量を絞りながら部屋の外に悪魔の声が漏れない程度のところまでマウスから手を放した。

「まずは自己紹介だ。おれの名前は汝唯斗ナイト。おまえの望を叶えてやろうかと思つて——」

由貴子は顔をしかめた。

「えっ。なに、どういうこと？」

困惑すると同時に由貴子は、パソコンが侵入者に駆逐されていることを悟らされた。

「ごめん。驚いているよね。でも安心して。君のパソコンに勝手に侵入はしているけれど君の性別も名前も住所も知らない。もつとも君にも僕のこととはわからない。警察だって僕の身元は調べられない。外国を含めた幾つものサーバーを経由しているからね」

汝唯斗は絶対に身元を突き止めることはできないと自信たっぷり口にすると同時に画面が切り替わった。新たな画面の右隅に椅子を持ち出すと、汝唯斗は腰をどっかりと降ろした。

「さて、ここからはあんたとコミニケーションをとりながら話を進めよう。あんたが言いたいことはコメント欄に打ち込めばいい。瞬時に俺様のところに届くようになってる」

白抜きのコメント欄を二重の黒枠が取り囲む。枠の隙間を、さあ早く打ち込めと急かすように小さな黄色いブロックが反転を繰り返しながらグルグルと走り回る。

「なんで私の？ どうやってパソコンに入り込んだのよ」

由貴子はキーボードに不安の入り交じった思いを打

ち込んだ。

「心配するな、おれが持っている情報はお前のパソコンに入り込むためのパスワードだけだ。本当にそれ以外は知らないし興味もない」

「だから、なんで私なの？」

「そんなに急かすな。おれにとつて誰のパソコンであろうと簡単に侵入できる。だからおまえがパスワードを変えてももう遅い。とことん付き合ってもらおうよ」

由貴子の不安はますます大きくなっていった。

「だから、なんで私なの？」

由貴子の不安が右肩上がりに大きく変化しているのがキーボードを叩く音で感じ取れる。

「わかったよ。あんたを選んだのはおれじゃないんだ」

「じゃあだれよ？」

「おまえ自身さ」

「私が私を選んだってこと？ 意味がわからない」

「おまえは今、誰かを殺したいと考えている。そう考えているおまえがおれを呼び込んだんだ」

「ばかをいわないでよ。そんなこと考えてなんかいいわよ」

「嘘をついてもだめさ」

「嘘なんかついていないわよ。でたらめいわないで」

由貴子は必死にキーボードを叩いた。『なぜ？ なぜ？』と呟きながら、汝唯斗からの投げかを振り払いたかった。保身の術を知らない由貴子は、否定の文字を拾い集めてはコメント欄を埋めつくした。

「おまえは、おれの張りめぐらした網に引っ掛かったのさ。殺人に関わる法律・法律用語・人の殺し方・完全犯罪・過去の殺人事件の検挙率・殺人事件の刑期・その他にも幾つものサイトを検索したじゃないか」

「私、そんなことしてないわよ」

「嘘をついてもだめさ。おまえのパソコンにはその履歴が残っている」

「うそよ、そんなの。その都度、ちゃんと履歴は消したわ」

由貴子は慌てて打ち込んだコメントを削除した。

『これでは自白しているも同じじゃない。危ない、危ない』

「今更消しても遅いよ。最初に言ったじゃないか、打ち込んだ瞬間にこちらに届くと。だからおれは、おまえに手ほどきをしてやろうと思っっているのさ」

「手ほどき？ なんの？」

「だから、完全犯罪のだよ。殺したい奴がいるんだろ。だからといって警察に捕まりたくはない」

「何をいつてるの。私はそんなこと思ってもいないし、必要もないわよ」

「もう、いい加減に自分に正直になれよ」

「なに言ってるの？ 私はいつだって正直よ。嘘なんかついてないわよ」

「わかった、わかった。じゃあ、遊びだと思っつけて合ってくれ」

「いいのよ。わかってさえくれれば」

「おまえは法律を犯すやつをどう思う？」

「どうって、そんなやつは社会の敵よ」

「そうだよな。おまえの心は正常だな」

「あたりまえよ。私をばかにしてるの」

「じゃあ、やむにやまれず罪を犯すやつは？」

「たとえば？」

「そうだな、たとえば一人娘が強姦されたことを苦に自殺したとする。殺人罪じゃない。強姦罪でしかない。

犯人は捕まったが、たった一年の懲役だ。復讐を誓った父親は犯人が出てくるのをまってその男を殺害した。どうだ、この父親は社会の敵か？」

「気持ちにはわかるけど、やっぱり犯罪は犯罪よ。復讐を許すわけにはいかないわよ」

「違うよ、この父親は社会の敵かと聞いているんだ」

「社会の敵は若い男よ。強姦よ。その結果、娘さんが自殺したのよ。父親の悲しみはそうとうなものよ。若い男を憎むのも当然よ。だからといって復讐はだめよ」

「わかんないやつだな、だからこの父親は社会の敵かと聞いているんだ。それに犯人を勝手に若い男と決めつけるな。おれはそんなことは一言も言っていない」

「そうよね。この父親を社会の敵と呼ぶには気の毒な気がするわね」

「そうだろうな。普通の感情の持ち主ならばそう思うのが当然さ。法律家でもない限りね」

「だからといってこの父親のしたことを肯定もできないわよ」

「肯定なんかする必要はない。えてしてこうした父親は自ら犯した犯罪を償おうとする。自首であったり自殺であったり」

「テレビドラマもそんなストーリーが多いわね」

「だろう。さらに、犯行の前に離婚などをして家族に類がおよばないようにしたりもする」

「復讐は遂げても、残された家族は悲惨よね」

由貴子は、復讐を遂げた父親に同情しながらも残された家族に思いを馳せた。

「話は変わるけれど、完全犯罪ってどう思う」

「罪を犯せば必ずいつかはばれる。この世に完全犯罪なんてないんだ。刑事ものの主人公がよく言うセリフにあるじゃない」

「あれはドラマの中の世界。現実的には完全犯罪が成立している事件は山のようにある。第一、事件として扱われるのは氷山の一角かもしれない」

「そんなことはないと思うけど」

「世間を騒がした三億円強奪事件、世田谷一家皆殺し事件。迷宮入りした事件なんか五万とある。どれも真犯人側からみれば完全犯罪の成立さ」

「そう言われればそうよね」

「それに、事件として表にでてこないものもある」

「たとえば？」

「東京湾にはコンクリート詰め死体の死体が幾つあるだろう」

「やだ、怖いこと言うのね」

「全国の方不明者の数は万を越える。自分の意思で消えた人もいるだろう。カミングアウトしてどこかの河川敷で生活している人もいる」

「そう言えばニュースで徘徊老人のことが・・・」

「そう、あれだって本当に行方知れずかどうかかわかったものじゃない。介護を嫌ってこっそりどこかに埋め

たつてこともあるかもしれない」

「そんな、家族よ」

「埋めなくても、どこか遠くの町で置き去りということだつてある。どうすればそんな遠くでと思われるほどの距離でだ。保護された痴呆老人の数の多さには驚くよ。家族はそのまま老人の年金を手に行している。保護された老人は税金で死ぬまで養われることになる。税金でだ」

「たしか、東京の老人が沖縄で保護つてのもあつたわね」

「老人だけじゃない。子供の例だつていっぱいさ」

「そう言えば、アパートで五歳児の白骨遺体が発見されたつてニュースで・・・」

「親が子供を殺して隠す。子供手当ではそのまま懐に」
「たしかにきりがいいわね」

「もちろん、何年か経つて発覚し逮捕されることもあるが、ほとんどは闇の中。これも完全犯罪といえる」

「所在のわからない児童が国内で六百人を越えてるつて現実よね」

「そう言うこと。このうちの何人かは土になつてることだけは確かさ」

「考えさせられるわね」

「話をもとに戻そう。完全犯罪の手ほどきをおまえは望んでいるだろ？」

「望んでなんかいいわよ」

「もつと自分に正直になれよ」

「あんたなんか言われたくないわ」

「まあいいや、続きは明日にしよう。じゃあな」

明るかつた画面が中央にしぼむように真つ暗になつた。そしてほんの数秒でいつもの立ち上げ画面に戻つた。由貴子は夢をみていたような錯覚に陥つた。家族が寝静まるのをベッドに横たわつて待つているうちに寝入ってしまったのだろうか。愛くるしいキャラクターの悪魔、汝唯斗とのやりとりは自分の心の中の思いが夢となつて現れたのだろうか。由貴子はパソコンの電源を落とし、部屋の灯を消すと小さな寝息を立てた。

「由貴子ー。早く起きないと遅刻するわよ」

母、淑子の大きな声で由貴子は枕元の目覚まし時計を弄つた。

「やだっ、どうして鳴らなかつたのよ」

文字盤に怒りをぶつけながら目覚まし時計を耳元で振つてはみたが、どうなるものではない。由貴子は慌ててパジャマをベッドの上に脱ぎ捨て顔を洗うと、お

気に入りのワンピースに着替えた。部屋の入り口に立
てかけられた姿見の前でゆっくりと体を返しながら裾
から腰にかけて描かれた紫色のトルコ桔梗に笑顔を戻
した。

「由貴子―」

階下で叫ぶ淑子の声に応える時間をも惜しむかのよ
うに由貴子は化粧をすますと、体をもう一度廻しワン
ピースの裾が広がるのを楽しんだ。

「由貴子、あなたはもう年頃なのよ。バタバタと着替
えてお化粧などして……。濃すぎず、薄すぎず。丁
寧に顔を創らないといい彼は見つけられないわよ」

「それより早く、早く」

由貴子が淑子を急かすと同時にトースターが代弁す
るかのように音を立てた。

「お父さんはもう出掛けたの？」

「ええ、今日は早番なの」

「そう。祐兄は相変わらず部屋にこもったまま？」

「……」

淑子には由貴子の問いかけに応えることができな
かった。

「一生このままなんてことはないでしょうね」

「大丈夫よ、祐介はきつと立ち直るわ」

「だといいわね。もう九年よ。十年近く勤めた会社を
突然やめて部屋にこもったの――。なにがあつたんだ
か知らないけれど。わずかな貯金も二年で使い果たし
て今じゃお父さんの稼ぎと年金を当てにして。新聞の
記事にあつた親の年金。パラサイトそのものじゃない」

「やめなさい、由貴子」

「だいたい、お父さんもお母さんも祐兄に甘いのよ」

「お父さんもお母さんも祐介のことを信じているわ。」

家族思いのあの子が……。――

「わかつたわよ。はい、これ。今月分」

「ありがとう、由貴子」

兄、祐介とは十三歳も歳の離れた由貴子。高校を卒
業し短大を出ると、この地域一番の総合病院の事務職
として採用された由貴子。仕事ができ、愛想もいい由
貴子はだれからも好かれていた。二十万円に少し欠け
る手取りから、今では毎月五万円を母に渡していた。

父、忠明の僅かばかりの退職金は家のリフォームを兼
ね、二世帯住宅へと造り替えられた。もとも、それぞ
れに玄関はあるものの二階に上がり切った踊り場には
連絡扉が設けられていた。祐介が嫁をもらっても困ら
ないようにとの思いの二世帯住宅だった。しかし、そ
の思いはあつさりと裏切られた。外壁のペンキが塗り

替えられるのと同時に祐介は会社へ行くことをやめ、真新しい部屋に閉じこもった。家族の誰もが心配し、理由を尋ねたがそれに応えるでもなくベッドにもぐり込み押し黙った。そして時には興奮したように壁を叩いたり蹴ったりと暴れた。九年前のことだ。

今では祐介も落ち着きを取り戻したとはいえ、相変わらず部屋の中にこもり、パソコンだけを生き甲斐にしているかのような生活を続けている。

松宮家の家計は、忠明の年金と淑子の年金を合わせて二十二万円。それに定年後に勤め始めた警備員としての忠明の給与が十万円ほど。合計、三十二万円が松宮家の一箇月のやり繰り資金として淑子に委ねられていた。四人家族の松宮家にとっては充分すぎるほどの資金になり得た。しかしこの収入は、年が明けると同時に大きく減額となる。忠明が勤める警備会社の規定により、満七十歳となる歳の暮れには契約が満了となり打ち切られるからだ。

たいした蓄えもなく、年金だけの生活。老夫婦だけなら贅沢さえしなければ何ら困ることはない。しかし、この年金を祐介が蝕んでいる。由貴子はこれを憂いていた。由貴子が入れる五万円は由貴子の結婚資金として本人名義の通帳を作って淑子が蓄えていた。す

でにその額は三百万円を越えている。

淑子は口では「いつかは」というものの祐介が立ち直る見込みのないことなどつくに承知をしている。

忠明に至っては祐介の存在そのものを疎んじている。そうは思っても我が子であることに違いはない。世間体を気にしながらも、今はこの現状を受け入れるしかなかった。

『いずれ私がこの家に毎月お金を入れない限り、松宮家の家計は成り立たなくなる。今は元気な両親も医者のお世話になりいつかは他界する。そうなれば祐兄にとって新たな寄生先を見つけないれば生きてはゆけない。当然まずは私に向けられる。私の稼ぎを当てにすることさえできず、この家に縛られる。やがてやってくる現実が目に見えるかのような気がする』

「由貴子、なにをぶつぶつ言ってるの。早くしないと遅れるわよ」

淑子に言われて由貴子は壁に掛けられた時計を見上げ、慌てた。

「じゃあね。いつてきまーす」

紫のトルコ桔梗が再び宙を舞った。

「由貴子、出掛けたのか？」

「祐介、あなたも早く食事をすませなさい」

毎朝繰り返される淑子と、祐介の会話。一日の会話の全てでもある。もつとも、忠明がいればこの会話さえもない。

祐介は自室にこもりながらも門扉の開く音には敏感に反応した。そしてその都度、窓のカーテンの端に手を掛け、音の主を確かめずにはいられなかった。時には、祐介自身が門扉を開き出掛けることもあった。淑子からせびり取った金を手に、パソコン専門店を訪れ、幾つかの部品を購入することもあればコンビニであったりもする。そしてどこでどうしているのか帰って来るのが翌日だったりもする。

祐介が自室にこもり始めた頃は、家族の誰もがこれほどに長引くとは想像していなかった。三十歳をも超えれば物の分別は付けられると高を括っていた結果が今の事態を誘因したのかもしれない。自分の子供に限ってという思いもあつたに違いない。祐介に蓄えがあつた間は近所への手前を除けば特に問題はなかった。

一年が過ぎ二年が過ぎた。祐介は蓄えがなくなると淑子にせがんだ。淑子が数千円を渡しながら「祐介いつまでこんな生活を続けるの？」と口にした。それでも最初のうちは祐介もうなだれるだけでなにも言わず、

申し訳なさそうに金を受け取っては外へと出掛けた。

「たいした金額じゃないんだから黙って出せよ」

そして時には、淑子から奪うようにして千円、二千円をせしめるようなこともあった。

そんなことが数回続いた。

「祐介、いい加減にしろ。大の男が情けない」

淑子から話を聞いた忠明が祐介の建屋の扉を開けるなり大声を張り上げた。祐介は背中を丸め、ベッドの中へと逃げ込んだ。

「明日からハローワークに通うか、この家を出て行くかどっちかにしろ」

忠明は微動だにしない布団の盛り上がりに向かって追い打ちを掛けるかのように吐き捨ててドアを閉めることなく建屋を出た。

その日を境に、行き場のない心の叫びを祐介は寢室の壁に拳を打ちつけることで晴らすようになった。拳を通して壁に残る祐介の赤い染み。祐介の心に空いた穴が壁に幾つもコピーされる。やがて祐介の心の悲鳴が、なぜか淑子の体にあざをつくりだす。忠明と由貴子がさらに祐介を追い詰めるかのように幾度となく諫める。

「祐介。なにが、あなたをこんな人間にかえてしまっ

たの？ お願いだから昔のあなたを取り戻して」

淑子は、祐介が金をせびりに来るたびに財布を取り出しながら懇願するかのよう涙を流した。

「うるさい。もう競争することに疲れたんだ」

祐介は、財布を淑子から奪い取ると同時に足蹴にした。淑子の体はバランスを崩しながらキッチンテーブルをずらすことに。テーブルの上に置かれた急須が床に落ち、形を崩す音が淑子の悲しみを増幅させる。一瞬の出来事ではあってもよろけた拍子に椅子の背もたれが淑子の二の腕に青い悲しみを残した。祐介は三千円だけを抜き取ると、倒れ込んでいる淑子の足元に財布を放り投げた。

「今におれの命と引き換えにしても返してやるよ」

祐介は、淑子に背中を向けたまま涙声にも似た小さな声で呟きながらキッチンを出た。

こんなことが半年も続くと、祐介が手を出せば淑子は無言で数千円を乗せてやるようになった。淑子も祐介もなにかを発するでもなく不定期にやってくる儀式のようになっていた。

何が切っ掛けとなったのかはわからないが、祐介に変化が現れた。

「母さん、悪いけど二千円くれないか」

祐介が申し訳なさそうに淑子に頭をさげた。

松宮家に罵声が響くこともなくなり、淑子があざをすることもなくなった。笑い声こそ聞かれることはなくとも、淡々とした日々が流れるようにはなつた。落ち着きを取り戻したかのような時の流れに見えた。それでも松宮家のだれもが時折、祐介の存在によつて波立つストレスに襲われた。

由貴子が病院から帰るのはいつも九時を廻っている。残業さえなければ七時過ぎには帰宅できるのであるがそうはしなかった。必ずコーヒーショップに寄り道をする。だれかと一緒の時もあれば独りの時もある。

「さあて、帰るか」

小さく呟きながら由貴子は腰をあげ、レジで支払いを済ませた。家に帰ると忠明は決まって居間のテーブルに新聞を揚げながら淑子とともにくつろいでいる。テレビ画面からは刑事ドラマの主人公が決めセリフを口に、淑子が領きながら湯飲みを握りしめている。祐介の建屋からは何の音も漏れてはこない。部屋着に着替えた由貴子が淑子の用意した夕飯を電子レンジで温め直した。

「お母さん、お風呂は？」

由貴子が小皿に箸を付けながら居間に向かって口にする。

「もう、由貴子だけよ」

淑子は、視線をテレビ画面から外すことなく由貴子に投げ返す。

「そう」

どこにでもあるごく普通の家族の会話が日常的に繰り返される。由貴子は風呂をすませ、ベッドの上で脱ぎ捨てたトルコ桔梗があしらわれたワンピースをクローゼットのハンガーに掛けた。

「ウイッヒッヒ、ラリロ、ラリロ」

部屋に入ると同時に電源を入れたパソコンが立ち上がり、昨夜と同じように画面の中を愛くるしい悪魔、汝唯斗が傍若無人に走り回りながら奇怪な笑い声を上げる。

「お仕事お疲れさま」

少し間を空けて続いた。

「あなた、どうして私が帰ったのがわかるの？ もしかしてストーカー・・・」

由貴子はパソコンのキーボードを叩いた。

「冗談じゃない。おれはストーカーなんかじゃない。むしろおまえにとって救いの神さ」

「神？」

「そうさ、神だよ・・・。まあ、そんなことはどうでもいい。昨日の続きだ」

「続きって、私はなにも人を殺したいなんて思っていないわよ」

「まあ、そう言わずに付き合え。人は誰もがこの世からいなくなればいいと思うやつが一人や二人いるものだ。だからといってそのまま実行するやつなんてほんの一握りだ。たいていは良心とやらに引き止められる。しかし、その良心とやらも警察を恐れているだけで完全犯罪が成り立つと保証されればもういものさ」

「わかったわよ。あなたに付き合っただけだよ」

「ずいぶんと恩義せがましいな、まあいい。おれの話についてこいよ」

「どうぞ、始めて」

由貴子は画面に食い入るかのように座り直した。

「まずは誰を殺したいかだ。おまえとの関係だな」

「だから、私にはそんな相手はいないって言っているでしょ」

「いい加減にしろよ。先に進めないじゃないか。まあいい。たとえばおまえの身近なやつだとする。家族だとか恋人だとか親友だ」

「仮定ってことね。それでいいわ」

「一番いいのは呪い殺す」

「呪い殺す？」

「そう。毎日毎晩、写真に向かって『死ね』と念を送る。これなら犯罪にはならない」

「呆れた。ばかじゃないの？ 黒魔術師みたいなことを言うのね」

「冗談だよ。おれが言うのは時を決めて相手を死に追いやる方法だ」

「なんか、ぞくぞくしてきたわ」

「そうだろ。やはり殺したいやつがいるからだ」

「わかったから、先に進めて」

「何度も同じことを言わさないでとばかり由貴子は面倒くさそうにキーボードを叩いた。

「わがままなやつだ。次は、殺した相手の死体が見つかるのが早い方がいいか、そのまま見つからない方がいいかだ」

「見つからなければそのまま失踪あつかいで完全犯罪ってことね？」

「そうだ。わかってきたじゃないか」

「でもそれじゃあ、本人も家族もかわいそうね」

「かわいそう？」

「だって、死んだのお葬式してもらえないのよ。

成仏できないじゃない。家族だって心配しつづけることになるのよ」

「おまえの言っている意味がわからねえよ。おまえは第三者じゃなくて実行犯だぜ」

「えっ、私が殺すの？」

「あたりまえさ。誰が変わってくれるのさ。大金を出して代役を探すか？ うまくいっても一生食い物にされるぜ」

「それはだめよ。こんどは、そいつを殺したくなる」

「そうだろう。だから自分でやるしかない。交換殺人だって同じだ。自分以外を信じちゃだめだ。それが完全犯罪の初歩さ」

「それでどうするの？」

「まだ質問に応えちゃいなぜ」

「どんな質問だったっけ？」

「だから、死体は見つからない方を選ぶか、発見される方を選ぶかだ」

「それなら発見される方ね」

「理由は？」

「だって、発見されないってことは土を深く掘って埋めるか、ドラム缶のコンクリート詰め海に捨てること

か・・・。とにかく体力のいることは無理よ」

「そうだな、女のおまえには無理があるな」

「どうして、私が女ってわかるのよ」

「どうしてって、おまえのセリフは女そのものじゃないか。小学生だってわかるさ」

「そりゃあそうよね。あなたが男ってわかることと同じね」

「次だ。死体が早く見つければ、死因もいつ殺されたかもすぐわかる」

「アリバイね」

「それもある」

「アリバイ以外になが・・・」

「捜査をミスリードするという方法もある」

「たとえば？」

「おまえとは全然違う犯人象を警察に思い込ませる」

「私とは全然違う犯人象？」

「そうだ。しかし、それでも完璧なアリバイは作っておかなければならない」

「おもしろくなってきた。トリック登場ね。それでどんなトリック？」

「なんか真剣身を感じないな。おまえのためにこうして時間を割いてやっているんだぜ」

「ごめん。怒った？」

「まあいい。ミスリードさせるための小細工としてあえて証拠を残す。つまり別人に結び付く証拠だ」

「その人、冤罪になっちゃうじゃない」

「完全犯罪のための犠牲者だってありえるさ。むしろそれによって完全犯罪が成り立っている事件も多い。再審請求が認められたって事件をニュースでよく観るだろ。冤罪は立証されるが真犯人が捕まったって聞いたことがないじゃないか」

「だけどそれはだめよ。他人に迷惑が掛かる」

「他人に迷惑？ おまえね、おまえは法律を犯すんだ、この法治国家で。それも殺人だ。他人のことなどかまっている余裕なんかどこにあるんだ」

「それでもだめよ」

「あきれるぜ。どっちにしても捜査の攪乱は必要だ。

それともう一つのミスリード」

「もう一つ？」

「そう。死亡時間」

「死亡時間？」

「だっておまえ、ドラエモンか？」

「はあ、言っている意味がわからない」

「どこでもドアを持っていないだろって意味さ」

「幼稚なジョークね」

「つまり、瞬間移動ができなければ死亡時間をミスリードさせるしかない」

「つまり死体の硬直時間の細工ね」

「それもあるが胃の内容物の細工も必要だ」

「そんなことできるの？」

「直接、胃の中をどうにかしようってことじゃない。そこまでは無理だ」

「じゃあ、どうするの？」

「詳しいことは、いざ実行って時だ」

「けちね」

由貴子がキーボードを叩きながらむくれた。

「その他には、死亡原因と犯行場所の細工も必要となる。複数犯に思わせる手もある」

「複数犯？」

「犯人は一人じゃなく、何人かによっておこなわれたってことさ」

「面白い。刑事ドラマみたい。刑事の困り果てた顔が目に浮かぶようだわ」

「おい、不謹慎だぞ。おれは遊び半分でおまえに付き合っているんじゃないぞ。人を殺すのを楽しむようになったら人間おしまだ」

「ごめんなさい。でも犯罪を犯した時点で人間失格よね」

「そうさ、社会から厳しい目で見られる。ましてや人殺しだ。生きて行くうえでそうとうな覚悟がいる。だから完全犯罪を計画するんだ」

「わかったわ。で、どうするの？」

「話はまだだ。衝動的に犯行を犯して慌てて細工をしても必ずばれる。日本の警察は甘くない。しかし用意周到に計画を練り、シュミレーションを繰り返し、問題箇所があれば修正する。とにかく、証拠の全てと取りえるものがおまえにたどり着かないようにする」

「あなたの言う通りにすればうまくいくようなきがしてきた」

「あたりまえだ。おまえは黙っておれの言う通りにしていればいい」

「それで、あなたへの報酬は？」

「おまえは何を学んだ。何もわかっちゃいない。おれはおまえから報酬をもらおうなどと考えちゃいない。そんなことをしたら足が付きかねない。それにおまえと接触するということは、おれがおまえの素性を知ることにも繋がる」

「そうか、今は報酬をいらないとはいっても状況

が変わるってことだって。事と次第によっては、わたしはあなたからゆすられるかもしれない」

「そういうことだ。完全犯罪の意味がない。危険は微塵たりともあつてはならない」

「わかった。で、最初になにをすればいい？」

「今日はここまでだ。続きはまた明日、じゃあな」

愛くるしい悪魔、汝唯斗が池の中にポチャンと音を立てたかのように沈んで消えた。由貴子は本当に完全犯罪など可能なのだろうかとかきながら部屋の電気を消すと目を閉じた。

翌日の由貴子は、仕事を終わると急ぎ足で駅へと向かった。『どこにも寄らずに帰宅し、七時には夕食を済ませそのまま風呂に入っている。いつもより二時間は早く自室のパソコンをオンにすることができる』肩からずれ落ちそうになったバックのひもを掛け直しながら由貴子は改札を通り、発車間際の電車に飛び乗った。

「ウイツヒツヒ、ラリロ、ラリロ」

由貴子のパソコンの画面をあの愛らしい悪魔、汝唯斗が走り回る。

「どうした、いつもよりずいぶん早い帰宅じゃないか」

「そんなことはいいから早く昨日の続きを始めてよ」
「わかったよ。死体は早く発見される方がいいんだっ
たな」

「そうよ。家族のためにはね」

「次は、殺害方法だ。自殺に見せかけるか事故、事件にするかだ」

「どう違うの？」

「残された家族にとつては大きく違う。世間の目もあるだろうし、保険の問題もある」

「保険？」

「生命保険さ。自殺、事件、事故では遺族が受け取る金額が違うってことさ」

「どうしてわたしが殺したいと思う相手が保険に入っていることを知っているの？」

「ついに本音がでたな」

「えっ」

「殺したいと思う相手って言ったじゃないか」

「ばかね、たとえばよ」

由貴子の動揺が、キーボードを叩く音を大きくした。
「強情なやつだ。それで？ 自殺、事故、事件？」

「完全犯罪でしょ。遺族が受け取る保険金は多い方が私も気兼ねしないですむわ」

「わかった。事件にしよう。捜査一課のお出ました」

「いよいよね」

「殺害方法は どうする。 なにか希望はあるのか？」

「女の私でも簡単に実行できる方法がいいわね」「じやあ、崖とかビルの上から突き落とすか？」

「そんなのだめよ。相手の顔を見れば決意がにぶるわ」

「そんなことを言ったら扼殺も絞殺も刺殺もできやしない。予め毒を仕込むか、遠くから銃殺・・・、後から車でひき殺す」

「だめだめ、もっと簡単な方法はないの？ わたしが知らないうちに相手が死んでいるとか」

「そんなの無理に決まっているだろ。いいか人一人^{ひとひとり}を殺すんだ。おまえだってそれなりの覚悟がないとそんなことはできやしない」

「そうよね。私に人殺しなんて無理に決まっているわね」

「なんだ、根性のないやつだな。じやあこの話は終わりにするか？」

「ちよっと待って。一応あなたの話を最後まで聞かせてよ」

「一応ってどういうことだよ」

「だから、あなたの話を聞いて私にも可能かどうかを

考えたいの」

「なんだ、それ。聞くだけ聞いて実行はしないかもしれないということか？」

「そういうこともあるかもしれないって話」

「ちえっ、テンションがさがるな」

「そんなこと言わないですよ。私は普通の人間なのよ」

「おれだってそうさ。殺人鬼というわけじゃないさ」

「わかっている。どことなく優しさを感じるもの」

「ちえっ、まあいい。続きを始めるぞ」

「ええ、お願い」

「まずは相手の行動パターンを知ることだ。どうだい自信はあるか？」

「行動パターンねえ・・・」

「なんだ、殺したいほど憎い相手なのに知らないのか？」

「別に憎んでいるわけじゃないわよ。それに私はお勤めしているのよ。昼間のことなどわからないわよ」「じ

やあ、日にちを掛けてでも調べるんだ」

「尾行するってこと」

「あたりまえじゃないか。いつも何時に起きて、どこに出掛け、どこで飯を買い、どこで喰っているのか、

何をして何時に帰るのか。どの電車、どの席、どこを

どう通るのか。とにかく相手の何もかもだ」

「次に完璧なアリバイだな。何人もの知り合いと一緒に時間を過ごす。それも長ければ長い方がいいな」

「たとえば？」

「会社の会議とか、同窓会とか・・・結婚式だとか」

「会議に参加するほど重要なポストを任されてはいないけれど、来月、友達との結婚式に招待されているわ」

「それだ、まずはその時にシミュレーションをしてみる。つまり頭の中での練習だ。本番は次の機会まで待つ。それまでじっくりと練り直しをおこなう」

「あなたの話だと実行するのは翌日よね？」

「よくわかっていないじゃないか」

「じゃあ、結婚式は何もしないってことよね？」

「そんなことはない。まずは殺す相手に買物をしてもらわなくてはならない。それに結婚式では如何に平静をたもつかが重要な鍵になる」

「どういうこと？」

「それに、買物は防犯カメラに相手が写ることが重要だ」

「そうなの？」

「本人が確かに買い求めたとビデオとレシートで確認されるようにする」

「確認って、警察に？」

「そういうことだ。弁当を買ってくればベストだ。

胃の中の未消化残留物と照合すれば何時に殺されたかが立証される。しかし、おまえには結婚式に出席したことで多くの証人がいる。アリバイは成立となる」

「なるほどね。でもそんなにうまくいくの？」

「そこだ。結婚式の翌日には殺人を実行することになる。そんなときに冷静でいることは難しい。どうかしたの？ なにか心配ごと？ などと聞かれることが問題なのだ。些細なことでも刑事に疑いを持たれることだけは絶対に避けなければならない」

「大丈夫、きつと普段通りにできると思う」

「それともう一つ。他に容疑が掛かっている人物がいれば、その人にも確かなアリバイを作ってやる必要がある」

「そうよね。自分だけ助かればいいなんて人間として最低よね」

「おまえは、時々理解に苦しむようなことを頓着しないで口にするな」

「えっ、なにか変なことを言った？」

「どんな理由があろうと殺人そのものが人間として最低じゃないのか。もつとも、そんなことを責めるつも

りはないけどな。完全犯罪を勧めるおれも最低だからな」

「たしかに、どんな理由があっても殺人なんてとんでもない身勝手な行為よね。でも、ここまできたんだから最後までやり遂げなければ。それで、どんな方法でその人のアリバイを作るの？」

「そうだな、たとえば日帰りのバスツアーなんかがいいな。招待券が当たったとか言って、ツアーに参加させる。完璧なアリバイだな」

「バスツアーね・・・」
「次は前もって集めておくものだ。いいかこれにはおまえの指紋はもちろん、皮膚片、髪の毛、唾や汗も付着することは絶対にだめだ」

「きびしいのね」

「あたりまえだ。日本の警察は優秀なんだ」

「それでどうするの？」

「まずは隣県に行く。遠ければ遠いほどいい。そこで煙草の吸殻、髪の毛一本。繊維クズ。洋服のボタン。全部、男もので揃えることだ。もちろん同一人物だ。かつ、真面目そうな人のをだ」

「何に使うの？ どうして真面目そうな人でないといけないの？」

「使うかどうかはまだわからない。真面目そうなのは、万が一にでもDNAが警察に保管されているとその人に迷惑が掛かる。それにその人には当然アリバイがあるから、トリックであることが警察にバレてしまう。犯罪とは無縁そうな人がいい。」

「なるほどね」

「それと重要なのは、それらの証拠品となるものには絶対に素手で触ってはいけない。手術用のラテックス手袋をはめ、かつピンセットを使え。ピンセットも新しい物を使い、購入してから一切素手では触れるな」

「厳重なのね」
「あたりまえだ。完全犯罪を^{もくろ}目論むには全てを完璧にしなければならぬ」

「確かにね。でも、どこで手に入れるの？」

「そんなことは自分で考えろ。骨董市とかフリーマーケットとか地方の祭りには多くの業者が集まる。古いナイフも手に入れる。紐状の物もあった方がいいな。もちろん素手では触るな。変装もして行け」

「それって、ナイフで相手を刺せてこと？ 首を絞めるってこと？」

「それもまだ決めかねている」

「その他に準備するものはないの？」

「テレビでもレンタルビデオでもいいから、男たちが揉めている会話と車が走り去る音を録音しておけ。それと、血液が手にはいるといいが・・・これは難しい」
「そんなことはないわよ。さっきの髪の毛の人と同一でなければ」

「そいつはいいや。仕事の関係か？ 看護婦でもしているのか？・・・どっちでもいいが血液はいらぬ」
「不自然さを見破られると真っ先に疑われる職業だ」

「そう、血液はいらぬのね」

「ああ、使わない。その代わり皮膚片ひふせんを手に入れろ」

「皮膚片？」

「そうだ。皮膚片だ。男ならだれのもいい。爪で引っかけて微量でいいから採取しろ。いやまて、爪じゃない方がいい。とにかく微量でいい」

「わかった。死体の左手の中指の爪の間に仕込むのね」

由貴子は祐介が左利きであることを思い浮かべながらキーボードを叩いた。

「おまえの殺したい相手の利き腕は左なんだ」

「だから、わたしには殺したい相手なんていないわよ。仮定よ、仮定。刑事ドラマによくあるじゃない。犯人の的をしぼりやすくするためにあえて犯人を左利きにする。あれよ、あれ・・・」

「いつまでも強情なやつだ。まあいい。採取したら乾燥しないように濡れティッシュの間にに入れて保管だ。腐らしてもだめだ」

「わかった。でもどうすれば採取できの？」

「実行までにはまだ間がある。じっくり考えろ」

「冷たいのね」

「あたりまえだ。おれはボランティアでおまえに完全犯罪の方法を教えているんだ」

「わかった。とにかく近いうちにみんな集めてみるわ」
「それでいい。だからといって使用するとは限らないからな。状況しだいだ。判断は自分でしろ」

「咄嗟にそんな判断が私にできるかしら」

「だから、シミュレーションを繰り返し返せと言っている。何度もしているうちにこれだというのができあがる。あとは実行だ」

「わかった。何度もシミュレーションを繰り返すのね」

「言っておくがナイフで相手を刺す場合は背中がいい。そうすれば警察は事件性を優先する」

「背中？ なぜ？」

「だって、自殺に見せかけるのは最初から除外するんだろ。被害者の家族が受け取る保険金は多い方がいいって言ったじゃないか。直接刺すのが怖ければ、樹か

何かにナイフを固定させ、相手を突き飛ばせばいい」

「確かに言った。背中ね。じゃあ、紐で首を絞める場合も後ろからね。どちらを選択するかはシユミレーシヨンしだいね」

「わかってきたじゃないか。次は死体だ。死体の発見時期は殺害後・・・、今の季節なら一週間後がいい。腐乱が始まる頃だ。そうすれば一日ぐらいの誤差は出る。そうなれば胃の中の残留物が決定打としての役割を果たしてくれることになる」

「そこなのよね。理屈はわかるけど難しいわよね。つまり、相手がコンビニで買って食べた弁当と同じものを翌日にわたしが買う。それを殺害前に食べてもらう必要がある。殺害日は、相手が防犯カメラに写るのはどこであろうと一切だめ。さらに殺害後、本人が昨日買ったコンビニのレシートをポケットに入れる。いや、サイフの中の方がいいかな・・・。ちょっと待って。私も防犯カメラに写るのはだめよね。」

「そうだ、そうだ。いいぞ。もつと頭を回転させろ」

「前日に食べた弁当の空は公園のごみ箱に捨ててる。そして予め録音しておいた男たちが揉めている声は、木陰にレコーダーを隠し、タイマーを使って近所の人に聞かせ、車が走り去る音も流す。警察はコンビニのレ

シートからその日の足どりを追う際に、だれかと揉めて車で連れ去られ、殺害されたと推測する」

「いいぞ・・・」

「ちよつと、邪魔をしないで・・・。一週間後に発見された被害者の胃から出た残留物で殺害日が断定されても私には完全なアリバイが・・・。でも確実に一週間後に発見されなければならない。その日より前では本当の殺害日が特定されてしまう。発見されなければもつと厄介なことに・・・。ねえ、そこはどうすれば？」

「一週間に一度、見回りが実施される施設を予め探しておけばいい。倉庫や廃工場・・・配電室・・・どこでもいいから」

「それともう一つ、同じお弁当をカメラに写らないようにどうやっての買うの？」

「コンビニの弁当は毎日同じメニューをどの店でも扱っている。隣県と同じコンビニで買えばいい。カメラに映ってもいい服装でな」

「なるほどね。でもどうやって相手に食べさせるかね・・・。わかっている。自分で考える。でしよ」

「あたりまえだ」

「死体の爪に皮膚片を仕込んで用意しておいたボタンを握らせ、煙草の吸殻や髪の毛をさりげなく置いてく

る。警察は被害者が殺される時に相手の腕を引っかき、洋服のボタンをちぎった。DNAが違う煙草の吸殻から複数の男たちが犯行に絡んでいると断定する」

「なんか、刑事ドラマそのものね。そんなにうまくいくのかしら？」

「うまくいくかどうかは、おまえしだいさ。いかに不自然さを残さずにやりとげるかだ。完全犯罪を仕込むのは簡単さ。しかし、やりとげるには度胸がいる。ビビッテいると必ずほころびを残す」

「そのためには、何度も頭の中でシユミレーションしていざ本番って時に恐怖に震えないようにするのね」

「ああ、じゃあな。うまくやれよ」

翌日から、由貴子は頭の中で何度もシユミレーションを繰り返した。『これならうまくいく』『やっぱりわたしには祐兄を殺すなんてできない。あんなに優しくした祐兄を・・・』シユミレーションは、由貴子を襲う幼いころの想い出との葛藤でもあった。

「由貴子、早くして。タクシーが迎えにきたわよ」

秋晴れの大安。由貴子とその両親は、タクシーに乗り込み駅へと向かった。

「お式は十一時半からだから充分間に合うわね」

淑子は自分に言い聞かせるかのように何度も口にした。淑子が気にしているのは、式場に予約しておいた髪セットとドレスの着付けの時間だった。由貴子が着るドレスは、一週間ほど前に宅配便で送ってある。

「大丈夫よ、おかあさん。式場からはドレスが届いたと連絡があったし、この時間なら問題ないわよ」

「そうよね」

「それよりお母さんもお父さんも日光の紅葉を楽しんできてね」

駅に着くと由貴子は両親がバスに乗り込むのを見届けて式場へと向かった。

一万四千円の出費は由貴子にとって痛い出費ではあったが、二人のアルバイトを確かな物にしておくために必要なバスツアーを奮発した。

結婚式も無事に終わり、由貴子は二次会ではしやぎすぎた疲れを駅前の喫茶店で癒したあと帰路についた。「いい、お式だった？ 次は由貴子ね、いつごろになるのかしら」

自宅にはすでに忠明と淑子がバスツアーから帰り、夕飯を済ませて居間で寛いでいた。

「もう、おかあさんったら。結婚式の招待状が届いてから何回そのことを口にしたと思うのよ」

「あら、そう。ごめんなさい。日光のお礼を言うのが先だったわね。久し振りにお父さんと水入らずで楽しかったわ。ありがとう」

「そう、良かったわね」

一日を振り返る三人の笑い声が、ときおり居間に広がった。その笑い声が電話のベルによつて遮断された。

「母さん、電話だ」

忠明に促されて淑子が腰を上げた。電話に出た淑子の顔が青ざめている。ただならぬ淑子の様子に忠明と由貴子は押し黙った。そして、淑子の震える声を通して聞こえるはずのない電話の向こうの声に聞き入った。

「お父さん、警察から……。祐介が死んだって……。」
忠明は淑子から受話器を取り上げ事情を聞くと、直ぐさまタクシーを呼んだ。

警察署に着くとそのまま死体安置所に案内され、祐介に間違いのないことの確認を求められた。

青く腫れ上がった蠟人形のような顔ではあったが祐介に間違いなかった。刑事の話によれば、詳細は今後の捜査によるが何者かに背中を刺され橋の上から川の中に投げ落とされたことによる溺死とのことだった。さらに、所持していたサイフの中にあつたコンビニのレシートから、弁当を買い求め近くの公園で食してい

たところを数人の男たちとなんらかのトラブルになり車で連れ去られたらしい。その直後に川に放り込まれ殺害されたことまではわかつているとのことだった。

「所持品から松宮祐介さんと思われ、何度もお宅に電話を入れたのですが何方もお留守のようだったの……」

三人は、それぞれ別の刑事から簡単に形式的な取り調べを受けた。

「ご息はなにかトラブルを抱えていたようなことはありませんか」

幾つかの質問を受けたが、だれも祐介が殺されなければならぬようなことは何ら思いつかなかった。

一通りの説明を聞いた由貴子の顔からは血の気が引き、からだ小さく震えていた。それでも由貴子は確かめずにはいらなかった。

「刑事さん、公園でのトラブルって何があつたんですか？」

「トラブルの内容までは判りません。公園で言い争う声と車が走り去る音を聞いたとの証言が獲られたものですから。何か思い当たることでも？」

由貴子の変化を刑事が見逃すことなどない。

「いや、特には何も……」

念のためにと刑事たちによる、由貴子の身辺調査がおこなわれたが疑わしきことは何もでなかった。それに由貴子には結婚式という完璧なアリバイがある。捜査は行き詰まり、三箇月後には数人の専任捜査刑事だけが残され、捜査本部は解散となった。いずれ迷宮入りとして捜査そのものが打ち切られることは目に見えていた。

半年ほどが過ぎ、担当の刑事が祐介の遺影に線香をあげにきた。

「申し訳ありません。我々の力不足でご子息の無念を晴らすことができませんでした」

刑事は深々と頭を下げて帰っていった。

由貴子は刑事の話の頭の中で整理していた。公園で祐介と犯人たちが争ったと思われる場所に僅かな血痕が残っていた。鑑定の結果、祐介のものであった。公園で背中をナイフのようなもので刺されたに違いない。ただし、その傷が致命傷ではない。傷はごく浅いものだった。そしてその近くのごみ箱にコンビニの弁当の空き箱が捨ててあった。それには祐介の指紋が残っていた。午後の十二時を少し廻った頃、公園にはだれもいなかったが、すぐ脇の家の主婦の証言が取れた。数人の男の揉めているかのような声。そしてそのすぐあ

とに車が走り去る音。その日の三時過ぎに公園から車で十分も掛からないS川の下流の浅瀬で祐介の遺体が発見される。背中以外の傷以外に右腕に小さな傷が見られたが、数日前の傷であることから事件とは関係ないと判断された。検死の結果、死因は溺死であった。

殺人がおこなわれたタイミングこそは違うものの由貴子が何度かシュミレーションしていた殺害方法と酷似している。犯人の皮膚片やボタンはその必要がなかっただけのことだ。いったいだれが祐介を殺害したのだろうかと由貴子は想いを張りめぐらしたが自分以外には思い当たらなかった。しかし、由貴子ではない。

すでに保険会社からは、殺人事件扱いとして三千万円が支払われている。契約内容によると、自殺ならば五百万円ほどであることから最大の保険金が振り込まれたことになる。

一周忌の法要が済み、祐介の部屋が片付けられることになった。由貴子は何気なく祐介のパソコンの電源を入れた。ディスプレイが明るくなるとデスクトップの背景に由貴子の目は釘付けとなった。あの愛らしい悪魔、汝唯斗が微笑んでいた。